

〔館蔵の名品〕

小 大 君 像

— 佐竹本三十六歌仙絵 —

江戸時代後期の大阪の文人木村兼葎堂（1736～1802）の「兼葎堂雑録」によると、かつて京都の下鴨神社の神庫には、鎌倉時代に描かれた三十六歌仙の絵巻物が伝わっていましたが、それはその後秋田の大名佐竹家の所蔵に帰しました。これがいわゆる佐竹本三十六歌仙絵で、上下二巻の巻物に十八人づつの歌仙の肖像を描き、下巻の巻頭には和歌の神として住吉明神の社頭図を添えていました。そして各人物の肖像の前にはそれぞれの略伝と代表作の秀歌一首を記しています。

佐竹本の歌仙たちは鎌倉時代の画家で、似絵（にせえ）という写実的な肖像画法を得意とした藤原信実の筆と伝えられています。画風の上で佐竹本は明らかに信実らしい特色を示していますが、全体が一筆ではなく、数人の手が認められます。そして伊藤敏子氏の説によると、佐竹本が伝来した賀茂社には鎌倉時代には、歌人として有名だった賀茂氏久がいました。氏久は当代歌道の第一人者藤原爲家と縁戚にあたり、住吉社の神主津守国助や似絵の名手信実・爲継父子とも親交を持ち、それらの人びとと歌合を催した記録が遺っています。そこで、もしこれらのグループが佐竹本の制作に関与したとすると、佐竹本の全画面のうち特にすぐれたものは、信実の自筆とする可能性が高く、その子爲継や門下の人も加わったかと、伊藤氏は推定しています。

一方、佐竹本の詞書の筆者については、後京極良経（1169～1206）と伝えられています。良経は歌人で、元久元年（1204）には太政大臣に昇っており、祖父藤原忠通の法性寺様書風を継承しながら、独自の個性ある書風を示す後京極流の祖として知られています。佐竹本

の詞書は確かに御京極流の筆跡ですが、良経筆と断定する根拠はありません。

しかし、同じく伊藤敏子氏によると後京極流は鎌倉時代にはさかに行われ、「紫式部日記絵巻」や「北野天神縁起絵巻」（承久本）などの詞書にもその書風が認められます。特に「承久本天神縁起絵巻」（承久元年に詞書が書かれた）には、後京極流の三人の筆跡が確認され、そのうちの第三巻（第一・二段）の詞書と佐竹本の詞書とは同筆と認められます。そこで佐竹本歌仙絵の成立も鎌倉時代の承久頃（1219～21）を中心とするものと考えられるわけです。

佐竹本三十六歌仙絵は現存する最古の歌仙絵であり、また絵も書も特に優れたものとされています。この絵巻物は長く佐竹家に秘蔵されていましたが、大正六年に売りに出た個人のものとなり、その後、ついで大正八年に再び売りに出されたとき、一括して個人に購入されるには余りにも高値であり、またこれを欲しがる数寄者が多かったため、一図ずつ分断され多くの所蔵者のもとに散ることになりました。この絵巻切断を決意し実行したのは、明治・大正の大財界人で、またすぐれた茶人でもあった益田鈍翁であり、一つ一つの歌仙を分けあったのは鈍翁と親しい実業家であり、茶人でした。

三十六歌仙の中には五人の女性が居り、それは斎宮女御、小大君、伊勢、小野小町、中務です。男子の歌仙が衣冠束帯に身を固めていたり、僧形であったりするのに対し、女子の歌仙は美しい十二単姿であるために、特に喜ばれているようです。そして、大和文華館では佐竹本の中でも殊にあでやかな小大君（こだいのきみ、こおおきみ、



小大君像（全図）

ともいう）を所有しているわけですが、小大君は唐衣（からぎぬ）に裳をつけた女官の正装で、優雅な衣裳美を示しています。

「小大君像」は分割後、生糸商で大美術品蒐集家であった原富太郎氏の所有でした。この絵には次のように、小大君の略伝と代表作の秀歌一首が記されています。

「小大君 三条院東宮時女蔵人左近是也。或書曰醜天皇孫。三品式部卿重明親王女。母貞信公女。一条院御時人

いははしのよるのちぎりも絶ぬへし、あくるわひしきかつらきの神」

この記述にあるように、小大君は三条院が東宮であった時に女蔵人（によくろうど）を勤めた女官左近のことです。ただし、「或書曰」以下の記述は、斎宮女御にあてられるべきものが、誤って混入したのです。和歌の意味は「葛城の神が岩橋をかけたのは、容貌の醜さを恥じて、夜の間ばかりを選んでのことです。男と女との愛も夜の間のこと。ところが、私の葛城の神のような容貌を、朝の明かるさの中で知られてしまっ

ては、夜の契りも絶えてしまうのではないかと心配です」と解されます。

小大君の勤めた女蔵人はやや下級の女官で、宮の雑事にたずさわる職掌でした。左近は宮中にあって多くの貴紳に知られていった才女だったのでしょう。小大君という別名が伝わるのも、この女性がその才能と美貌とにより、宮廷において人の心を捉えてやまぬ魅力に満ちていたからでしょう。

この歌は大納言朝光（あさてる）がまだ若かったころに、夜左近のもとに忍んで来、翌日明るくなっても帰ろうとしないので、困って詠んだ歌です。もう帰って下さいという心を、遠まわしに、しかも自らへの愛がまさるよう、朝の葛城神の醜い顔のような自分を恥じる心で巧みに歌っています。恋の女性心理というものが、よく表わされた歌と申せましょう。

「小大君像」はあでやかな絵姿と情趣あふれる歌とにより、王朝女性の熱情をよく表わしたものとして、佐竹本三十六歌仙絵の中でも、特に魅力ある作品と申せましょう。

（成瀬不二雄）

季刊 美のたより No.76

昭和61年 8月28日

発行 大和文華館